

bälgüsi なる語は「外に現はれて認むることを得るもの」の義なれば此の一句の意味は「此の強き（支配する）根の働きは能く顯はれ居るものなり」との意なるべし。

(28) ラドロフ氏は又た kerkün を以て「識る」(erkennen) と解せざる可らずといひ、「善惡を正しく識別せざる可らず」との意なりと解けど (Kuan-ši-im Pusar 102)、然も此の語は必らずミューラー氏及び氏自身の別に説きしが如く「信ずる」の意なり、善惡を信ずるなることは、勿論漢文に見ゆるが如く善惡の理を信ずるの義と見得べければ、特に此の語の意味を變じて「識る」と解くべきに非るなり。

(29) kim 以下の三語は、ラドロフ氏の斷片には、kirkünmäsär は ögünmäsär と見え、而して氏は kim を auf das; damit と見て、「善惡を識別せざる可らず、人は之によりて後悔を生ぜざるに至る」と譯し、而して kim をかゝる意に用ゐ、又た主文の後に從屬文を置くことは、ウイグル語の語法に反するものなればこれ必らず譯者が本文に支配せられて、かゝる書き方を爲したるものなるべしといへり (Kuan-ši-im Pusar, S. 102)、されど原文には只だ「善惡之理、不得不信」とあるのみなれば氏の如く解釋するは當らず、寧ろ kim は普通に用ゐらるゝ「誰」の意に解きて「誰か此の後信ぜざらむ」と譯する方好かるべし。

(30) kädäkä の肩に文字の補入あれども識別する能はず、思ふに「書きし」の如き意味の動詞なるべし。

(31) törü tuqu の二語は漢文の「殯葬」の二字に相當するものなれども、何故にかゝる語を用ゐしかを知らず、五體清文鑑に「下葬」を tukuradu と譯したるは、或は此の tuqu と關係ある語なるべし、törü なる語は、此の經にも屢々見ゆるが如く、「法」の意にして、tuqu は規矩、準繩の義なれど、又た儀式の義ありしか。

(32) iyar は別の斷片には inar と見ゆ、今其の語義を知らず。

(33) pürütmäk (bürütmäk) は pürüt+t にして、ラドロフ氏のトルコ語方言集にも bedecken machen と見え、「封ずる」、「包む」、「覆ふ」、等の意なれば、此處の「閉」に相當するものなるべし。

(34) kitärmäk は kit- (去る、亡ぶ、消ゆる) の causative form にして「亡ぼす」、「除去する」の意なれば、漢文の「除」にあてたるものなるべし。

(35) simak は「破る」「征服する」の意なれば (ラドロフ氏方言集) 漢文の破に當る、而して sinmak は其の reflective form にして「破らる」「壞るゝ」の意なり、されど漢文には「破らる」「壞る」の語存せず、或は「危」に對せしめたるものなるべきか。

(36) ormaq ラドロフ氏の方言集によれば Čagatai 語 Uigur 語にて「置く」「据ゆる」(stellen, hinlegen geben) の意にして「軍旗を建つ」の「建つ」に對して此の語を用ゐたる例をも擧げたれば、此處の「建」に當るものなるべし。

(37) ornanmaq はラドロフ氏の方言集に ornamaq を Uigur 語、Čagatai 語等にて